
甘恋-Amagoi-

無才男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘恋 - Amagoi -

【Nコード】

N6172Q

【作者名】

無才男

【あらすじ】

アタシは恋多き乙女

アタシは小悪魔

でも・・・ だけど・・・

” 本当の ” 恋はしたことない

恋ってなに？

えっちのこと？

それならいろんな男と寝てきた

こんなアタシに 本当の 恋

くるのかなあ？

小悪魔びつちで勘違い女な”アタシ”が
本当の恋を見つけるまでのケータイ小説風
チラシの裏作文（笑）

第一章 浮気（前書き）

2年前、mixiでの日記ネタがなかった時に
某恋愛ケータイ小説の存在を思い出し
適当に書いた（ネタ）小説です。
深く考えずダーっと読んじゃってください。

第一章 浮気

ほんとアタシは
いろんな男と関係を持つてきた

ホスト 学生 ホームレス
医者 教師 サラリーマン

でもそんなアタシにも
カレがいる

誰よりもアタシを思ってくれる
カレ

今のカレは同窓会で再会した
同級生

カレは すごく いいやつ
アタシが呼んだらすぐ来てくれるし
欲しいもの買ってくれるし

でもそくばつきーなのがタマにキズ

だからアタシは ほかの男と寝るの

だっていつも野菜ばっかじゃ
飽きるじゃない？

たまには肉料理も食べなきゃね

アタシ ベジタリアンじゃないし

その肉料理な ひと も
実は同級生

名前は ユウジ

ユウジは優しい
束縛もしない でも愛してくれてる

申し分ない
本当はカレになってほしいくらい

でもユウジには
彼女がいる

しかもその彼女は
アタシの親友 トモミ

お互い知らない
複雑な関係

バレた時のことなんて全然考えてない
浮気されるほうが悪いんだ

アタシは悪くない
ユウジも悪くない

大丈夫 このままずっと……

行けると思ってた
なのに……

第一章 浮気（後書き）

2年前にちよつとだけ書いたケータイ小説（笑）を
4時間ぶつ通しで書いて無理やり完結させてみました。

小悪魔びつちで勘違い女な”アタシ”が

本当の恋を見つけるまでのケータイ小説風

チラシの裏作文（笑）となっております。

BGM字幕付動画はコチラ <http://www.nicovideo.jp/watch/sm13494682>

第二章 複雑

おれの名前はユウジ
いきなりだが 結論から言おう
はっきり言つて

俺の女は 可愛い
世界一 と言つても
いいほど 可愛い

これは 決して
自慢でも 惚気でもない

なぜなら 俺は女性に
感心 興味がないのだから

俺はいわゆる 同性愛者
ホモセクシャル であり
きちんと愛しあっている
彼氏 もいる

悲しいことに
同性愛者は 日本ではあまり
理解されず
偏見を持って 接されるのが
心苦しいところだ

だから俺は世間体のためだけに
カモフラージュとして

彼女を持つことにしたのだ

俺の 彼氏は

両性愛者 つまり

バイセクシャル なのだが

付き合ってる彼女より俺のことを大切に
思ってくれている

しかしある日

保っていた均衡が崩れた

平和だった均衡を 俺が
崩してしまった

カモフラージュとして

付き合っていたはずの

彼女の親友と

体の関係を もってしまったのだ

俺は今まで自分が

ホモセクシャルだと思っていたが

どうやら 彼氏と同じ

両性愛者 だったようだ

しかもさらにその

関係をもってしまった女が

彼氏の 彼女 だった

世間は狭いものだ

ほんとうに 狭い

こんな複雑な状態に
なってしまうなんて
思いもよらなかつた
これからどうなってしまうのだ

怖い バレるのが怖い
いろいろなおもいが
あたまを駆けめぐる

第三章 衝撃

今日は ユウジとの
ひさしぶりの デート
それにしても
ユウジから 誘うなんて
珍しい

いつもはユウジの 彼女
そしてアタシの 親友の
トモミと 遊ぶからって
あんまり 時間とれないのに

ユウジも アタシの魅力に
メロメロになっちゃったかなア
なあんて 思っちゃう

だって 昨日
急に電話があって

「話したいことがある」
だなんて

そう思っちゃうよ……

「今日ぐらい……
期待しても……いいよね……」

それにしても 遅いなあ
そう思ったときだった

見慣れた男とユウジが
こっちに向かってきた

「え……?」

「ごめん。遅れちゃって
ちよつとカズキと喋ってて。」

「えっ　なんで　え?」

動揺して言葉にならない
無理もない

なぜユウジとのデートに
カレ　と一緒にいるのだ

そもそもなぜ
カレ　とユウジが
一緒にいるのだ

接点なんて……
ないはず……なのに……

「なんで?なんで……」

「えっ。いやだからカズキと喋ってて
遅れちゃったんだ。ごめんね」

「いや、あの　そういうことじゃなくて
なんでユウジとカズキが……?」

「……」

何故かユウジが黙った

なんで？なんでカズキが
ユウジと一緒にいるの？
もしかしてアタシと
ユウジの関係がカズキに
バレたの……？

アタシが驚いていると
カレが咳払いをして口をひらいた

「とりあえずここじゃ
なんだから場所移そう」

なんで・・・？ なんでよ
なんで アンタが
しきってるの？
何様？

今日はユウジとの
大切な日だったのに
なんでアンタがいるの？

「場所……うつそ
どっか ヒトがいないとこ」

そう言ってユウジは
アタシの手をつかんで

歩き出した

「ねえ ユウジ
なんでカズキがいるの？
友達なの？」

「……………」

なんで黙ってるの
ねえ ユウジい…………

誰もいない静かな
公園のベンチ

今まで沈黙だった
ユウジが口を開いて

アタシと出会う前の話
そしてアタシと出会った理由
話してくれた

話をまとめると
ユウジはカズキと
同じ男子校でその時から
付き合っていたらしい

ユウジとカズキの
接点をアタシが知らないはずだ
ユウジと知り合ったのは
大学のサークルで

別の学部

カズキと知り合ったのは
大学の学部だったのだから

カズキもユウジも

アタシを騙してたの？

「うそ……だよね……？」

「……………」

ねえ ユウジ何か言ってるよ
いつもみたいに笑ってるよ

なんなのよ

冗談っていつてよ

うそだよね

なんなのこれ

なんなの

こんなのってアリ？

利用していたはずの

カズキが

実はアタシを利用してて

信じかけてた

ユウジが

カズキと出来てて

アタシを騙してた？

ほんと なんなのこれ

信じられない

こんなのとてないよ

こんなのとて……

ありえないよお！

第四章 自棄

いろんなことがありすぎて
あのあとどうやって

家に帰ったのか 正直覚えていない

同時にふたりの男に

裏切られるなんて

アタシは 本当に不幸な女だ

騙された

アタシは 騙されたんだ

アタシは 誰からも

必要とされてないんだ

アタシの居場所はもうなくなったんだ

アタシは自分を責めた

消えてしまえ

こんなアタシは消えてしまえばいい

死にたいというより

消えたい

消えたい

消えたい

そう つぶやきながら

カミソリで手首を切る

アタシが傷ついても
誰も悲しまないんだ

アタシはいららない子なんだ

薬をいっぱい飲んだら

楽になれるのかな？

気分 楽になるかな？

アタシは睡眠薬を大量に飲んだ

あれからどれくらい時間が

経ったのかわからない

天井のまぶしさで目が覚めた

「いつまで寝てんだ バカヤロウ
早く起きて笑顔見せるよ」

誰……？

ポタッ

冷たい……水……？

いや……涙……？

誰か泣いてる……

「早く起きろよお……」

「え、まさか……」

シュウ……「？」

第五章 再会

あたしはいろんな男と
遊んできた

薄汚れた女だ

だから 神様がアタシに
罰を与えたのだろう

アタシを愛してくれた男
アタシが好きだった男
2人同時にいなくなるなんて
思いもしなかった

もう誰も信じられない
最初から信じてなんか
いなかったけれど
もう信じたくないんだ
でも

こんなあたしにも昔
心を 許せる男がいた

いわゆる幼馴染ってやつ

名前はシュウ

シュウは本当に優しかった
何をするにも

アタシのことを
まず一番に考えてくれた

それだけじゃない

シユウはアタシの

命の恩人だ

アタシが中学時代

イジメにあっていた

命を粗末にした時期があった

そんなとき幼馴染だった

アイツが言ってくれた

言葉

”もつと甘えていいんだぞ

俺はおまえの弱さを知ってる

俺の前だけでは強がるな”

”俺が守ってやるから

命はもう二度と粗末にするなよ”

体の関係はなかったけれど

ココロは繋がっていた

少なくともアタシは

そう思っていた

シユウもきつと

そう思っていてくれたのだろう

でもシユウは中学卒業と同時に

海外へ転校してしまった

もう会えないと思っていた
なのに……

そのシュウが今
目の前にいるなんて
信じられない

これは夢？
それともアタシは死んで
ここは天国？

アタシは意識が朦朧としていたが
かすれた声でその
懐かしい名前を呼んでみた

「シュウ……？」

「……目エ、覚めたのか……よかった
本当によかった……」

「ばかやるお……
アレほど命は大事にしろって
いったじゃないか……」

もちろんここは天国でも
夢でもなかった
幼馴染だったシュウと

数年ぶりに再会したのだ

それからアタシは

シュウに色々な事を聞かされた

最近日本に戻ってきたこと

アタシの実家に電話して

アタシが倒れたことを知って

慌てて病院まで来てくれたこと

シュウは全然変わってなかった

アタシのことを第一に考えてくれた

昔のシュウのままだった

昔の事を話しながら

アタシは確信した

シュウがアタシの運命のヒトだったんだ
って

その日初めてシュウと交わしたキスは

今までの色んな男とのキスより甘く

えっちより激しく幸せなものだった

この幸せがずっと続けばいいな

退院したらシュウに

この想い 伝えよう

第六章 疑問

あれから三ヶ月が経ち
今日でようやく退院

アタシはカレと別れて
シュウと付き合いだした

シュウとは病院で何度かえっちをした
今までの男より愛のあるえっちを
比べられないくらいの
最高の愛をもらった

正直 アタシは今すごく幸せだ
これがかつて望んでいた
甘い恋なんだ
って そう思える

アタシが想いにふけっていると
ナースさんが声を掛けてきた

受付の方にお友達のかたが見えてますよお

「シュウかな？今日は迎えに来れないって
言ってたのに来てくれるなんて」

シュウのサプライズかな？
そう思いアタシは受付へ足を運んだ

「あれ？あの後ろ姿はシユウ？」
「迎えに来てくれたはずのシユウが
なぜか診察室に入っていていくのが見えた」

「どうしたんだらう？体でも壊したのかな？」

そう思っていると
後ろから声をかけられた

「今日退院なんだって？」

ユウジだった。

「ユウジ？いまさらなんで？」

アタシが睡眠薬を大量に飲んで
入院したあの日から一度も
姿を現さなかったユウジ
いまさらなんで来たのと
アタシは一方的にユウジに責め立てた

「ごめん。でも」

そうユウジがいかけたが
アタシは我慢できなかった

「帰って。」

もう二度とアタシの前に姿みせないで」

ユウジは黙って病院を出て行った

アタシを裏切ったヤツなんて
もう知らない

アタシはシユウだけ居ればいい

それにしてもシユウ

なんで病院に？

なんの病気だったのかな

明日にでも聞いてみよう

この時のアタシは

まさかシユウが大変な事になっていたなんて
みじんも思っていなかった

第七章 喪失

アタシは声がでなかった

今まで色んな事があつたけど

シユウがいたから楽しく過ごせた

でもこんなに今シユウの言葉を

聞きたくないなんて

耳を塞いでしまいたいと

思うなんて

シユウが病院に来ていたことだつて

ただの風邪かと思つていた

もしなにか別の病気でも

今度はアタシが支えられたらなあ

なんて思つていた

アタシは甘かった

うつむいて黙っているアタシに

シユウが話しかける

「ごめんな。ずっと黙つてて。」

「実は外国に居た頃からもう分かつてたことで」

「今日こっちの病院で聞いたらもう 手遅」

そう言いかけたところで
アタシは言葉を遮った

「もういい 何もいわないで」

シユウは 転移性肝がんという
病気をわずらっていた

最初は肝臓だけだったらしいが
今では全身に転移してしまい
生存率は5パーセント以下だそうだ

それからアタシとシユウの
闘病生活が始まった

第八章 暗闇

暗闇の中 アタシたちは
激しく抱き合った

これまでしてきたシュウとの
えっちの中でも一番熱いえっち

何度も何度も
体を重ねあった

シュウの腰が痙攣するのと同時に
シュウの体を強く抱きしめ

キスをした

アタシの中でシュウの体液が広がり
至福感が体を包み込んだ。

アタシの中がシュウで満たされた

…それから 十日くらいが経った頃
闘病生活もむなしく
シュウはこの世を去った

シュウ 大好き だったよ

大好きだったシユウがいなくなった
フタリの男に裏切られ
心の支えだったシユウも
いなくなってしまうた

シユウの前では気丈にも
涙をみせなかつたけど

もう我慢できないよ
アタシは誰にすげばいいの？

もう誰もアタシを必要と
してくれるひとはいない

誰かアタシを助けて

そんな時間きなれた声が
アタシを呼んだ

「もう一度、俺とやり直してくれないか？」

ユウジだった。

シユウを失った悲しみなのか
アタシはユウジに抱かれていた

ユウジは慰めてくれた
ユウジはアタシが自殺未遂をした後

カズキとも別れていたという
その事を伝えるに
あの日病院に来ていたのだった

そして今日トモミとも別れてきたらしい

アタシはユウジに裏切られたと思っていた
けど違った

本当に愛していたのは
アタシだけだったんだ

今までバカな事いってごめんね
好きだよユウジ

すべて元通りってわけには
いかないけれど
アタシとユウジは
やり直すことにした

第九章 絶望

ユウジと新しい生活が始まった

まだシユウのことは
忘れられないけれども

アタシには今はユウジがいる

今を大切にしようと思った

でもアタシはやっぱり不幸だった

ある朝、開くはずのないドアが開き
女が現れた

ユウジいいいいいいい！

アンタ裏切ったね！

私のこと 好きじゃなくなっただって？
アンタずっと浮気してたんでしょ！

カズキくんから全部聞いたよ！

絶対許さない！
殺してやるからア！

ユウジの家に突然

乗り込んできた女は
アタシのかつての親友

トモミだった

浮気相手は アナタだったのね
そう……親友のアナタが
私を裏切ったの？

トモミの手には包丁が握られていた

ヤバイ！そう気づいたときには
トモミはもうアタシの
目の前に来ていた

「あぶないっ！」

その声と同時にユウジが
アタシの前に飛び出してきた

え？

ブシャー

キヤアアアアアアアア

な、なんでコイツをかばうの？
ユウジ！ねえユウジ！

そうトモミはいうと
ユウジを刺した包丁で
自らの首を切って死んだ

第十章 生命

アタシはこれまで色んな人を失った

大好きだった幼馴染、シュウ

アタシをかばって死んだ、ユウジ

アタシの親友だった、トモミ

ホントに色んなことがあった

でも得たものもある

それはシュウの子だ

あの夜アタシは

新しい命をこの身に宿した

ユウジともえっちしたけれど

きっとこれはシュウの子

間違いない

アタシが愛したシュウの

子供に違いないんだ

……

あれから数年がたち

アタシは娘と 幸せに過ごしている

娘にはいつも

パパはすごくカッコよくて
優しい人だった と話している

思い出 たくさん思い出
優しさに包まれて

そうしてアナタは生まれたと
そういつも いい聞かせている

辛いことはあつたけれど
今は誰よりも大切な人との
愛の結晶がアタシには いる

だから若かりしころの
この日記は封印

押入れの奥にでもしまっておこう

アタシにはもう必要のないものだから

最終話 甘恋

私はママの日記帳を閉じた

私がパパの事を聞いても
カッコいい人だった 優しい人だった
ただそれだけしか言わない訳が

パパの写真が子供の頃のしか
ない訳が

ママがどうして私に
パパのことを隠したがったのか
いまなら分かる気がする

「そう……私とママは似ているんだ」
手首についた幾多の赤い線をみながら
私は ため息をついた

「あの親にしてこの子あり」
といったところね

わたしは睡眠薬を飲んだ

そうだ 深い深い
夢の中で 甘い恋をしよう

おわり

最終話 甘恋 (後書き)

文字数の関係で後から付け加えました。これはひどい。……無才男
先生の次回作にご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6172q/>

甘恋-Amagoi-

2011年2月4日20時27分発行